ミュージアムコレクション 1

楼閣を描いた土器

●コレクション・データ
時　　代　弥生時代中期
調　　査　唐古・鍵遺跡第 47 次調査
発 見 年　1992 年
大 き さ　竪 8 cm、横 10 cmcm
展示位置　第 1 室　中央ケース

弥生時代の絵画土器として、もっとも著名なものが、この楼閣を描いた土器です。

弥生時代の絵画土器は、土器の焼成前にヘラ状の工具で線刻をしたものが大半です。高床建物や人、鹿、魚などムラ周辺の存在する対象物が描かれました。この楼閣の絵は、高さ50チンほどの壷に描かれたもので、3つのかけらが残っていました。

弥生時代の建物は、これまで竪穴住居や高床倉庫と考えられてきました。こうしたイメージは、戦後直後におこなわれた登呂遺跡の調査による部分が大きく、教科書などでもおなじみのものでした。唐古・鍵遺跡の土器に描かれた楼閣は、二階または三階建ての重層構造と考えられ、建物の規模や構造において、これまでの常識を覆すものだったのです。

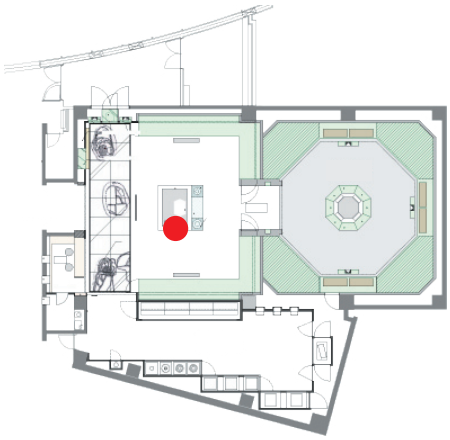
ところで、土器に描かれた楼閣は、具体的にどのような建物だったのでしょうか？

多くの学者が連想したのは、中国の画像石や明器（墓に供えるための焼物）にみられる楼閣建物でした。楼閣は、中国では前漢時代後期に出現し、後漢時代に普及しました。得に中国の南方では、楼閣の最下層に壁のみられない例があり、唐古・鍵遺跡の楼閣を考える上で、参考になるかもしれません。

次に大きな問題となったのは、楼閣の描かれた経緯です。中国でみられる建物が、どうして唐古・鍵遺跡において土器に描かれたのでしょうか？

ある学者は、中国を訪れた倭人や、中国から来た漢人が、中国の楼閣を描いたと考えました。しかし絵画土器の題材は、身近に実在するものを描いた例が多く、唐古・鍵遺跡に楼閣が存在した可能性も残ります。こうした問題の解決は、将来の発掘調査が期待されます。

いずれの考えを支持するにせよ、大陸の文化的な影響が、近畿に及んでいたことは確実で、当時の唐古・鍵ムラが、中国の史書にみる「国」のひとつであったと考えられます。



ミュージアム上面図と展示位置